Vol.
10

Shumei International

NEWSLETTER

Shumei

Shumei International is dedicated to improving the human condition by restoring the environment, by fostering a deep appreciation of beauty and the arts, and by cultivating leadership among the next generation.
Shumei International has programs around the world. The organization is based upon the philosophy of Mokichi Okada. He taught that cultivating respect for nature and appreciation of the inherent beauty in the natural world will inspire a more humane and sharing vision for the world community.

Shumei International

NEWSLETTER

Vol.10

contents

【表紙】
バンダナ・シバ博士が主催されるナヴダーニャで保存される原種の種

Photo by Ron Cunningham

Shumei

秀明インターナショナルは、1.国際協力 2.環境問題への取り組み 3.優れた芸術による人心の向上の3点を基本的なプログラムとして実践します。この実践により、個々の人間性、精神性の向上を促し、社会へ新しい人生観、価値観を提唱したいと考えています。そして、私たちと同様の目的を持つ世界中の人たち、団体と協力しあい、世界平和に貢献していくことを目指しています。

Special Topics INDIA

2 インド訪問 Bhoomi.
アースフェスティバル・ナヴダーニャ
美を求める心
Shumei国連担当理事 アリス・カニングハム

土壌の活力を取り戻す
Shumei開発途上国支援担当理事 アラン・今井

心をひとつに
Shumei国際協力 研修生 森田知里

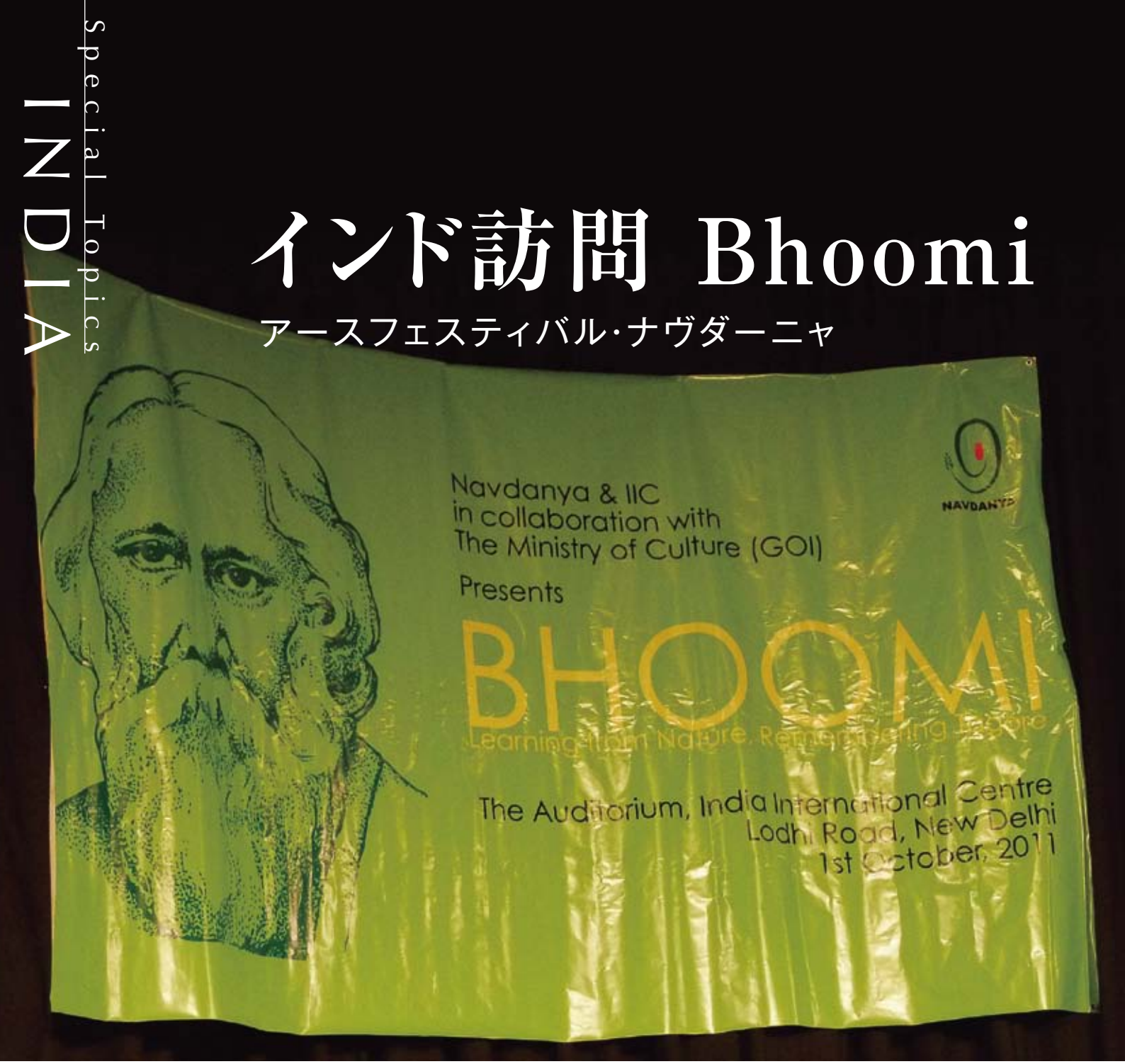
11 ザンビア訪問レポート
Shumei 国連担当スタッフ(New York office) クリスティーナ・マヨ

広がる村
Shumei International Institute スタッフ マシュウ・クローリー

19 Shumei被災地支援活動報告
滋賀・絆・アート支援プロジェクト

インド訪問 Bhoomi

アースフェスティバル・ナヴダーニャ



２０１１年10月、Shumeiはインド、ニューデリーで行われた「Bhoomi～アースフェスティバル」に、バンダナ・シバ博士より招聘を受け、参加しました。

このイベントは、バンダナ博士が主宰するナヴダーニャとIndia International Centerが共催で、環境をテーマに毎年行われているものです。今年は、インドの詩人であり、また環境活動にも力を注がれたラビンドラナート・タゴールの生誕１５０年を記念して、彼の功績を讃え、彼の詩を通して自然の大切さを再認識する内容となりました。

子どもたちの歌や踊り、地球を題材にした人形劇や自然、美、教育についてのパネルディスカッションなど、朝から夜まで多岐にわたった催しがあり、多くの聴講者で賑わいました。Shumeiからはアリス・カニングハムが「美について」、アラン・今井が「秀明自然農法について」発表しました。

Shumeiがこのイベントに参加するきっかけとなったのは、２０１１年４月に滋賀県で行われた「水と土と農のフォーラム」に、バンダナ・シバ博士が来日された際、秀明自然農法に触れ、その精神性、美、料理にとても感動されたことです。10月にインドで行われるアースフェスティバルに来て、Shumeiの自然農法、美、そして日本料理を紹介してほしい、日本とインド、お互いの素晴しい食文化、豊かな農業文化をシェアし、讃え合いたいと熱い思いを投げかけてくださいました。

今回の「Bhoomi～アースフェスティバル」、ナヴダーニャの研修は、Shumeiとナヴダーニャが、お互いの多様な文化を認め、持続可能なよりよい社会を創っていくためのパートナーとして、絆を深くするとてもいい機会となりました。

美を求める心

Heart that seeks Beauty seeks Divine

Shumei国連担当理事　アリス・カニングハム

アリス・カニングハム

まず最初に、今回のアースフェスティバルにShumeiをご招待してくださり、本当にありがとうございます。バンダナ博士、ナヴダーニャの皆さん、心よりお礼申し上げます。

ほとんどの環境会議では統計や技術に関する論議が常でありながら、このたびこのアースフェスティバルで美について語る機会を与えて下さったことに心から感謝致します。それは今、環境問題を取り上げる中で、美の役割こそ必要だと思われるからです。

バンダナ博士とは2009年のコペンハーゲンでの国連環境会議で初めてお目にかかり、環境に対する考え方、清浄な土や種の重要さなど、Shumeiと共通するものが多々あると認識しました。その後友好を深めるのち、バンダナ博士が私たちと同じく、美の大切さ、美こそがまさに地球、自然に不可欠なものであるという考え方を持たれていることに共鳴致しました。

先ほど観た映画「ハーモニー※」やタゴールの「自然から学ぶ」という言葉は、まさしくShumeiの創始者である岡田茂吉師が私たちに説いていることです。美、そして自然から学ぶということは私たちのフィロソフィーの根幹を成すものであり、私たちは三つの融合した要素（三つの芸術活動）を通して、より良い人格形成を促し、よって健全でバランスのとれた理想社会建設を目指しています。一つ目は美による感化、二つ目は自然と調和した農法である自然農法、そして三つ目が精神性、日々の生活に精神的価値を反映させることです。

「ハーモニー」でも描かれていましたが、自然をスピリチュアルな

ナヴダーニャ［「9つの種」の意］
インドの作物多様性の維持と食糧の自給自足促進を支援するために1991年バンダナ・シバ博士によって組織された。デリー北東の街、デラドゥン郊外にある農場では400種に及ぶ在来種の穀物や野菜が育てられ、種子保存と生物多様性に重点を置いた教育プログラムも行われている。

※ ハーモニー … 環境について、イギリス・チャールズ皇太子の視点で語られたドキュメンタリー映画。バンダナ・シバ博士はじめ、著名な環境活動家たちが出演している。

アースフェスティバルでコーラスの発表

ものと捉え、そこに存在する精神的価値を理解することがとても重要です。そしてそのことが、日々の生活の中で本当の美を見つけることにつながると思います。本当の美とは何なのでしょうか？

本当の美とは外郭的なものだけではなく、もっと内なるもの、根底にある深い意味を持っているものです。例えば、美術品をただ外から美しいと見るだけではなく、その美術品が持つ、歴史、作り手の技術、思い等々、包括的な美を指します。また、自然の中にある美は、ただ目で見る美しさだけではなく、五感で感じ、そこに宿る生命の息吹を理解することです。命を育む自然を理解する目を養うことが大切だと思います。なぜなら、自然が全てを生み出してくれているからです。

自然は過不足がなく、完璧な存在です。ですから、人間は自分たちが一番優れているかのように横柄にふるまい地球を支配しようとしていますが、本来は私たちが自然から学ぶべきなのです。自然から学ぶことはたくさんあります。人間が直面する種々の問題の解決策は自然から得ることができます。今こそ、美しい自然界における、私たちの役割が何なのか理解するべきです。

現代社会において、人間は森林伐採等、自然を破壊し、自然が私たちに与えてくれているものに対する感謝をすっかり忘れてしまっています。まさしく、物質的な発展や利益ばかりを追求した結果、自然の摂理、自然界に存在する精神的要素をないがしろにしていると言えるでしょう。岡田茂吉師は自然を尊重した農業、自然農法を農業の芸術と唱えました。農業(agriculture)とは、農業を営む文化であり、それを理解することが重要なのです。日本やインドでは、もともと国民のほとんどは農民であり、日々の生活の中で、生育サイクルに感謝し、自然をよく見つめ、四季がもたらす恵みに感謝していました。

自然界には、小さい虫から動物、木々など多種多様な生き物が共存し、この地球を構成しています。この地球上に存在しているもの全てが、地球全体の美に貢献しているのです。そして、それは芸術に関しても同じことだと思います。世界を一つのキャンバスに描かれた絵として考えたとき、さまざまな色で描かれているほうが美しく、決して一色で塗りつぶされるべきではないと思います。ですから、私たちが住む世界もさまざまな人種、文化、伝統がそれぞれの美を表現し、全ての生物が互いを尊重し合いながら共生すべきだと思います。まさに、自然界から学ぶべき教訓です。

日本には、美を日々の生活の中で表現するという伝統がありました。それぞれの季節を感じさせる花を活けたり、書を書いたり、食を楽しんだり、装いを変えることで、自分自身だけでなく、周りの人々とも美を取り入れた生活を営んできました。特に、食に関しては味覚だけではなく、盛り付け、配膳に至るまで、心細やかな気配りが施され、食に対する深い理解が培われてきました。子どものころから、作物を作る農家への感謝、食事を調理してくださった方への感謝の循環が自然な形で築かれてきました。しかし、残念ながら最近ではその文化も見られなくなってきています。

農業を単なる生産手段とみなし、食を単なる空腹を満たす

フェスティバルでの発表をご覧になるバンダナ博士

ための手段とすることによって、農業や食がもたらす文化や美が重要視されなくなり、結果、自然や食文化を通して本物の美を認識するすべが失われてきています。

美に対する価値観の低下により、人間社会に於いて、精神的文化と物質的文化のバランスは崩れ、人と人とのつながりだけでなく、自然とのつながりも崩壊しつつあります。

健全な人間社会と豊かな地球を目指すとき、私たちは本物の美を求める心を大切にしなければならないと思います。

そのためには、意識の転換ということが一つの鍵になると思います。私は、美とはある意味とてもシンプルなものだと考えています。美はどこにでも存在し、私たちは日々美しいものに囲まれて生活しているのです。要は、それに気付けるかどうかという意識の問題なのです。私たちは日々忙しく過ごし、木々の色の変化や、雨のしずくの音や、自然の微妙な変化に気付かなくなってきていますし、気付こうともしていません。岡田茂吉師は、日々の生活の中から美を見つけ出すことの大切さを唱えました。一度立ち止まり、よく観ることです。そして、自分の心で美を感じることです。

今の世の中を見れば、経済至上主義の中、人々は強欲で、畑にしても収量を増やすための単一栽培がほとんどです。これのどこに美を見出せるのでしょうか？自然にはあらゆる種類のものが共生し、それだけで完璧な美を表現しているのに、人間の欲でその美を破壊していることに気付いていないのです。そのことに気付き、少しでもものの見方を変えれば、きっと今の私たちの生き方は自然に反していると感じられるのではないでしょうか。

また、相手のことを考え、相手に喜んでもらいたいと思ってとる行動や態度も美のあらわれです。本当の美とは、相手の幸せを祈ることだと思います。私たち一人ひとりがもっと他の人のことを考えるべきです。今の世の中には利己主義の考え方がはびこり、利他愛の気持ちが薄れているように感じます。頭で損得を考え、行動しているのです。本物の美は、頭で考えるものではなく、心で、魂で感じるものだと思うのです。

岡田茂吉師は美しい環境は人々の心を美しくする働きがあると仰っています。美しいものに囲まれて暮らすことで、私たちの心も美しくなります。醜い環境の中で満たされた幸福を感じることはないでしょう。どんなに金銭的に裕福でも、本物の美しさに囲まれていなければ、殺伐とした環境の中では幸福感を味わうことはないでしょう。

本物の美によって私たちの心は満たされ、高揚するのです。魂が浄まることこそが、最高の美です。美が私たち自身を高めてくれ、一人ひとりの魂が浄まれば、それは世界平和につながっていくのです。すなわち、美は私たちと理想社会をつなぐ架け橋なのです。私たち誰もが、一人ひとりの中に美しいものを求める心を持っており、それは精神性を求めること、神様を求めることと同じだと思います。美しいものを求める心―その大切さに世界中の人々が気づくことができたなら、世界はより美しいものになると思うのです。岡田茂吉師は『天国は美の世界』と表現しました。私は、この表現は正しいと

地球を題材にした人形劇

信じています。全人類が一人ひとりの心の中に美を感じることができれば、そしてそれを表現することができれば、世界は美しい心で満ち溢れるのではないでしょうか。

（質疑応答：自然農法についての質問を受けて）

自然農法を実施するにおいて、バランスということが鍵になります。この農法は、自然を尊重し、自然から学ぶ農法であるからです。自然環境、特にそれぞれの土地の性質をよく観察し、理解することが大切なポイントです。これは美を見出すことと同じです。それぞれの地域がそれぞれの美を持っており、それは在来種の種や作物のように、その土地に適したものです。私たちがそのことを理解する目を養えば、外部から何を言われようとも、自分自身の目で何が一番よいかを判断できるのです。例えば、肥料や農薬を使うことによって高い収穫量を得られると言われても、長期的に見たときに、実際は土の力を弱めていることに気付きます。化学肥料や農薬で毒性に汚染された土は美しいでしょうか？　汚れのない、清浄な土こそ美しい土と言えるのではないでしょうか。私たちが自然に感謝するということは、自然の清浄さを大切にすることにつながります。バンダナ博士も自家採種の重要さを説いてくださっているように、種も清浄であるべきなのです。ですから、持続可能な農業を考えたとき、それぞれの土地をよく観察し、理解し、自然の働きを学び、自然に即した農法であるべきです。そしてそれは、長い期間、自然と共に生きてきた先祖の叡智だと思います。

また、自然農法を語る上において、技術面についてはあまり固執していません。一番大切なのは、自然を尊重し、自然から学ぶというアプローチであり、生産者や消費者自身が自然に対する思いや行動を見つめることです。方法や技術ではなく、心や意識がとても重要なのです。私たちは自然農法を技術的なものとして普及しているのではなく、生き方として提唱しているのです。

これは、農業に従事する人だけのことではなく、私たち人間全てに言えることですが、私たちそれぞれが、何が本当に美しいのかを考えなければなりません。奪うのではなく、分け合うことです。謙虚であり、この母なる地球から不自由なく頂いている恵みに感謝することです。そういった気持ちや態度が本当に美しいものだと思います。この気持ちは全ての人が持てるものです。そうすれば、今私たち人類が直面している問題の解決策はほぼ得ることができるように思います。それと同時に、豊かさの定義についても考える必要があると思います。経済至上主義をこのまま貫き、物質的な豊かさだけが本当の幸せなのでしょうか？日本ではご存じの通り、津波の被害があり、多大な損害を受けました。全ての財産を失った人々は、家族や人とのつながりが何よりも大切であると気付いたのです。確かに物質的な発展は必要です。しかし、精神的な発達とのバランスがとても重要なのだと私は思います。

そのためにも本物の美を求める心を養うことが大切であり、美がもたらす重要な役割を今一度それぞれが考える時期ではないでしょうか。

土壌の活力を取り戻す

Rejuvenating the soil

Shumei開発途上国支援担当理事

アラン・今井

左:バンダナ・シバ博士　右:アラン・今井

この豊かな精神文化を持つインドにおいて、あえて今まであまり公の場では話さなかった、目には見えないスピリチュアルな視点から秀明自然農法での「土壌の活力を取り戻す」ということについてお話ししたいと思います。私たちは全てのものに目に見える〝物質〟と、目には見えない〝スピリチュアルな部分〟があると考えています。ここでは物質を「体」、スピリチュアルな部分を「霊」としてお話し致します。人間はこの世に生まれてきた以上いずれ死んでいかねばなりません。その時、物質である肉体は土へと還りますが、霊はそのまま霊界という所で生き続け、その後再び生まれ変わって帰ってくるという考えがあります。仏教で言う輪廻転生という教えです。

いずれにしても、今ここで生きている私たちは単なる肉体だけの存在ではなく目に見えない魂(霊)もその中へ入って生かされているということです。植物も同様、その体と共に霊というものを持って生きており、さらに秀明自然農法では土にも目に見える体の部分と見えない霊の部分があると考えています。

一方、慣行化学農法においては、見えない霊的なものということについては全くと言っていい程考えていないのではないでしょうか。土は植物体を支える物質でしかなく、土も植物も人間や動物の食べ物生産のための手段でしかない。そしてそれに関わる農業者さえも生産のための動く機械のように取り扱われているとしか思えません。工業品生産の場で生産効率向上のための機械化とその労働者の関係が、まさに農業の世界へも大量生産工業化として盲目的に進められてきました。そのことが化学肥料・農薬開発、機械化、ハイブリッド品種改良、さらには遺伝子組み換え技術へとつながってきているのです。

秀明自然農法の根本原理は「自然尊重」です。ここで秀明自然農法の創始者である岡田茂吉師の論文を一部紹介させていただきます。

『ここで今一つの重要事がある。それは今日までの人間は理性、感情等の意志想念は動物のみに限られると思っていた事である。ところが意外にもこれが無機物にもあることを聞いたら唖然とするであろう。勿論土も作物も同様であるから、土を尊び土を愛する事によって、土自体の性能は充分発揮される。それにはなによりも土を汚さず、より清浄にする事であって、これによって土は喜びの感情が湧き活発となる

のは言うまでもない。ただ意志想念が動物と違う点は、動物は自由動的であるに反し、土や植物は非自由静的である。故に稲に対しても同様感情の念を以て多収穫を念願すれば、心は通じお蔭は必ずあるものである。この理を知らないがため、見えざる掴めざるものは、すべて無と片付けている処に、科学の一大欠陥があったのである。』

秀明自然農法実施の上で大切な要素が三つあります。それは土、種子、農業者です。土とは、造物主がこの地上に生きる全ての生物を育むために造られたものです。土には 本来、それ自体に植物を育む力が備わっており、肥料を施す必要はありません。自然界では森や野山は、肥料を与えなくても青々と息づいています。逆に、肥料を投入することはかえって土本来の力(生命を育む力)を弱らせてしまうのです。肥料や農薬を使用せず、土を清浄化し、土が生命を育む力を引き出してやることが大切なことなのです。

そして土が本来持っている生命を育む力を「自然力」と呼びます。自然力は、太陽・月・大地からそれぞれ放射される(霊と体の)三つの力が融合することによって発生します。この力によって一切万有が生成化育され、万物の生命力の根源でもあります。

次に種子には記憶があります。自家採種を繰り返すことで、種はその土地の気候・風土を記憶し、地域に適合した熟練した優秀な種子となっていきます。

ザンビアで自然農法プロジェクトを始めたとき、ザンビアでは深刻な干ばつに見舞われておりました。ほとんどのトウモロコシが枯れてしまっているなか、青々と育っていたのは在来種のトウモロコシでした。その在来種のトウモロコシを秀明自然農法で自家採種を続けました。数年後の干ばつや大雨のときも、自然農法のトウモロコシは枯れなかったのです。この種は、自分でいつ発芽したらよいかを知り、また命が繰り返していくなかで、種が過去の困難な状況を乗り越えた記憶を持っているからだと思うのです。

次にある農家の体験ですが、ある年、ニンジンを収穫した際、傷んだものがいくつかありました。普段は、自宅用として食べるそうですが、たまたま奥さまが全て捨ててしまったそうです。そして秋になり、奥さまがニンジンの種をまきました。ところが3種類まいたニンジンが、どれ1つ発芽しませんでした。種をまく人の心の中を見通していると気付き、心から反省し種をまき直すと、やっと芽を出したというのです。

この体験からも、土も種(作物)も人間と同様に意思想念を持っており、農家や圃場に関わる人がその土や種子・作物に感謝の念を注ぐと土や作物は大いに喜んで土の性能が向上し、作物は立派に育ってくれるのです。

工業化された慣行農法によってその生命を蝕まれてきた「土壌の活力を取り戻す」には、その目に見えない霊の部分を認識し土に感謝し大いに愛情を注いで、人間が土と信頼関係を結んで作物を生産していくことが必要であると考えます。

心をひとつに

アースフェスティバルでの体験を通して

Shumei 国際協力　研修生　**森田知里**

私は料理担当として、Shumeiの青年5名と共にアースフェスティバルに参加しました。

イベントのフィナーレともいうべき、ディナーに150人分の日本料理を…との依頼で、準備が始まりました。提供するメニューは、ちらし寿司、野菜の天ぷら、味噌汁、豆腐、漬物、白玉小豆、ほうじ茶に決まり、ディナーレセプションのテーマが「チャンパー（インドの花）とサクラ」ということで、サクラをイメージしたディスプレイも用意しました。

そんななか、現地から、放射能の問題で日本からの持ち込みは規制がかかっているという情報が入り、現地で食材を調達した方がいいのか・・・と、いろいろな思いが頭を交錯しました。しかし、バンダナ博士が感動されたのは、秀明自然農法の食材で作られた料理で、そうでなければ意味がないように感じました。大使館にも状況を確認し、検討した結果、用意した食材を全て持っていく決断をしました。不安のなか、フライトを終え、あれほど心配していたのが拍子抜けするぐらいスムーズに、ノーチェックで入国することができました。

初めてインドの国に降り立った私たちは、驚きと興奮に包まれていました。ニューデリーの空港は人と車で溢れ、クラクションが四方八方から鳴り響く中、迎えのタクシーに乗り込みました。

調理は、会場のホテルの厨房を使わせてもらいました。フェスティバルのディナーは、私たちが提供する日本料理のほかに、ナブダーニャの方やホテルのシェフたちが作るインド料理もビュッフェ形式で一緒に提供されるとのこと。一緒に料理しているなか、インドの文化やカースト制度の名残、厳しい

階級制度と貧富の差を目の当たりにしました。厨房の中でもランクが決まっており、料理する人、皿洗いの人、掃除の人と服装が違い、一生その仕事から上にはいけないと聞きました。

フェスティバル前日に話した皿洗いの男の人は、「僕は明日、この洗い場のリーダーなんだ‼」と誇らしげに言い、またある掃除担当の人は、「将来、掃除のリーダーになるのが夢」と、日本では考えられない現実に驚き、望んで努力すれば可能性はいくらでも広がる日本に生まれた私たちは本当に幸せだと、あらためて感じました。こういった厳しい階級制度のなか、一番高い立場の総料理長が私たちのことを大変気に掛けてくださり、彼のおかげで全ての段取りがスムーズにいきました。

食事は、バンダナ博士はじめゲストの皆さんが大変喜んでくださっていたと聞き、本当に安心しました。料理の説明をしているときも、皆さんがとても興味を持たれていて、食を通しての文化交流ができ、また料理もほぼ残ることなく大盛況でした。ナヴダーニャのスタッフの方より、「料理もおいしかったし、ディスプレイの仕方も本当に素晴らしかった」と喜ばれ、また総料理長はお味噌汁が特に気に入ったらしく、「ホテルのメニューに加えたいからレシピを教えてほしい」と、日本料理を認めてくれたように感じ、とてもうれしく思いました。実を言うと、日本料理がインドの人々に受け入れられるのか、少し心配もありました。インドに来てからの数日間、インド料理ばかり食べていましたが、どれも香辛料の味が強くて、こんなに辛い料理が好まれているのに、果たして日本料理はおいしいと思ってもらえるのか不安だったのです。しかし、今回日本料理をインドに紹介できたことを誇りに思いました。料理を通しての文化交流、そしてそれぞれの国の多様な文化を共有し合えることの素晴らしさをインドで実際に体験させていただきました。

今回の体験を通して、人種や言語、文化、宗教の違いに関係なく、心の通い合った交流を持つことができました。協力する素晴しさを体験し、「世界人」という感覚はまさしくこのことなのだと強く感じることのできたインド訪問でした。

ザンビア訪問レポート

Report-1

クリスティーナ・マヨ

Shumei 国連担当スタッフ(New York office)

2011年7月、Shumeiが支援するザンビアのムババラ地区、そして新しくプロジェクトが始まったペンバ地区を訪問しました。今回、ザンビアへは初めての往訪となり、今までShumeiがムババラ女性農業共同組合と2005年にパートナーシップを結んでから、プロジェクトが年々進展する模様をアラン・今井やバーバラ・ハチプカから聞いていましたが、今回の訪問で、プロジェクトの根底に流れる実践的要素に気付くことができました。

早朝にルサカへ到着してすぐ、ムババラ女性農業共同組合を目指して南へ向かいました。約3時間の走行中に、ザンビアでは最大のサトウキビ生産地マサブカを通過しました。ムババラ

ZAMBIA

【ザンビア共和国】

アフリカ大陸東南部に位置する。コンゴ、ジンバブエなど8つの国に囲まれた、平均海抜1000～1300mの高地。雨季(12月～3月)と乾季(4月～11月)があり、7月は年中で最も寒い時期にあたるが、日本の5月くらいの気候で過ごしやすい。面積は日本の約2倍、人口は約1千万人。日本との時差は7時間。通貨はクワチャ(K)で、ジュース1本、食パン1斤が50円位で買える。イギリスの植民地を経て、1964年に独立した。

レンガづくりのゲストハウス

組合のユニフォーム

へ着いたのは、自然農法ショーが開幕する前日の午後。組合員と挨拶を交わしてから、プロジェクトの現場へ視察に行きました。そこは村の酋長（リーダー）が提供した土地でした。見学したのは、コミュニティセンター、畜産経営プログラム、完成間際のゲストハウスです。このインフラ建設には、周辺の土で作った天然レンガが使われていました。レンガは組合の所有する機械で製造されており、この自家製レンガには感心させられました。世界の建築物はほぼ輸入資材に依存しており、ほとんどの加工木材には有害物質が含まれているからです。日が暮れ、現場を後にしましたが、まだ、組合員たちは自然農法ショーの準備に慌ただしくしていました。

翌朝プロジェクト現場へ行くと、大勢の組合員にびっくりしました。総勢で2千人ぐらいいたでしょう。その場の空気から興奮が伝わり、皆の顔は幸福に輝いていました！　設置されたテーブルには、メロンやトウモロコシ等の自然農法野菜、自家採種の種が並びました。どこも美しく飾られ、同時に、音楽演奏、歌、踊り、サッカー、競走試合も開催されました。コミュニティーとしての一体感とその一員である誇りが、空気に漲りました。

女性農民たちはインタビューで、「自然農法で生活が楽になり、家族を養い、服を着せ、子どもを学校に出せるようになった」と口々に述べました。現在ザンビア女性の出産率は平均6.7人で、生計手段を必死で探さないと子女を学校へやれないという窮地に追い込まれています。女性農家の証言によると、自家採種、市場の確保、水へのアクセスがプロジェクトを支える肝心な要素ということです。

他にインタビューしたのは、チーフ・マパンザです。この王者のような風格を持つ老人は「殿下」と呼ばれ、地元の人々からずっと敬われてきました。チーフの務めは、争議や村全体の福利に関する決定です。この重大な責任を長年背負ってきたチーフは、駐日ザンビア大使を歴任した経験者なのです。このような人格者にお目にかかれて光栄でした。チーフはShumeiとムバラのパートナー関係を全面的に支援すると、ザンビア周辺地域へ

の拡大を望んでいました。

また、ショーを訪れたザンビア政府地域開発省の大臣はプロジェクトの成功に感動し、「ザンビア国内での拡大を全面的に応援する」と約束されました。さらに、「自然農法の野菜は味が優れている」、と語られました。大臣の奥さまは、「女性農家が感化され、自立していく成長ぶりが素晴らしい、女性に有益な影響を与えた重要なプロジェクトである」、と力説されました。

その後、新たに自然農法プロジェクトが始まったペンバ地区へ移動しました。ここはムババラから2、3時間離れた村です。でこぼこした砂利道を走っていき、到着すると、予期もしない大歓迎に圧倒されました。私たちは何百人もの組合員に取り囲まれ、歌って踊る彼らから握手を求められました。興奮、熱気、歓喜にのまれそうでした。

ペンバ地区の自然農法ショーも大盛況でした。女性農家はテーブルをきれいに飾り、野菜、種、籠を陳列しました。レースやサッカーの試合も行われました。アラン・今井はムババラとペンバの各ショーで、参加者全員の前で現地のトンガ語による歌を披露しました。歌詞には自然農法の基本理念が盛り込まれており、村の皆もとても楽しそうに彼と共に歌っていました。これは秀明自然農法の理念を教えるのにとてもよい方法です。

ペンバ地区はわずかな建設しか進んでいません。集会センターの基礎工事が着工したばかりです。組合員はプログラムの進展に期待を寄せ、その運営に必要な共同施設の建設を待ち望んでいます。女性農家は「トラックがぜひ欲しい、野菜を市場へ運搬するのに使いたい」、と口をそろえて話します。組合の将来に大きな希望を託しています。

私はザンビアを去るとき、このプロジェクトに対する理解が深まったと感じました。組合員たちと触れ合い、彼ら一人ひとりが自分たちのコミュニティをより良くしたいと願い、懸命に努力して参加する姿を見られたことは素晴らしい体験でした。彼らは自然農法ショーを毎年待ち焦がれながら精一杯働き、1年の成果の締めくくりとしてショーへ全員が参加し、村人同士の強い絆を確認し合い、熱心な努力の

自然農法ショーに並べられた野菜や工芸品

賜物を披露するのです。

このザンビアプロジェクトは、国連の任務に貢献する偉大な成功例です。プロジェクトの背後に、地球温暖化や食料安全のような現代の抱える問題が潜んでいます。2008年度の農業科学技術国際アセスメント（IAASTD）報告を含む現代の調査は、女性農家のような小規模生産者の支援を特に掲げ、アグロエコロジーの実践を通して生態系や自然環境を保護し、長期的な食料安全を保障する必要性を説きます。その一方で、地域に根ざす伝統的な知恵を守る重要性も強調します。

ザンビアプロジェクトは、国連ミレニアム目標にも関連します。飢餓や貧困を削減し、栄養面で健康を図り、地方の暮らしを改善し、女性の地位を高め、教育の機会を与え、持続可能な環境をつくり、途上地域の発展に貢献する国際的協力関係として、特筆すべき事例だからです。ムババラ女性農家共同組合とShumeiのパートナーシップは、世界の幸福増進のために不可欠な協力体制です。

2012年6月20～22日にブラジルのリオデジャネイロで、国連持続可能な開発会議（リオ+20）が開催されます。これは、地球サミットと呼ばれる国連環境開発会議の20周年を記念する行事です。

リオ+20には2大テーマがあります。1つは、貧困撲滅のための持続可能な経済発展、2つ目は、持続可能な開発を支える体制づくりです。農業は、グリーン経済の核心として話題を集めることは間違いありません。また、世界中のNPO団体が躍起になっているのは、政策決定者への働き掛けです。つまり、生態系を保護する食料生産システムを重視した支援、さらに、小規模農家に重点を置いた援助が政策に必須だからです。Shumeiはこれを応援するだけでなく、ザンビアとのパートナーシップをリオ+20の席上で最前線のモデルとして発表したいと思っています。

広がる村

Report -2

マシュウ・クローリー

Shumei International Institute スタッフ

7月、ザンビアでの自然農法プロジェクトの先駆けとなったムババラ地区と、最近これに加わったペンバ地区で開催される自然農法ショーへの参加という素晴らしい機会を得ました。旅の友はクリスティーナ・マヨさん、ロン・カニングハム氏、小山昌英氏、そして、アラン・今井氏でした。ルサカ国際空港に着くと、現地プロジェクトの責任者バーバラの夫サイモン・バンダが迎えてくれ、この夫妻が行く先々で私たちをもてなしてくれました。

カメラマンとして私はこの旅行を夢見ていました。ザンビアの人々の美しさに触れた感動は、まだ余韻が残っています。この旅で私の心（魂）をつかんだのは、このザンビアの人々です。生活基盤、例えば、食の安全、清らかな水、教育、公衆衛生は大きな問題であるものの、人々の素朴で、心の底から湧き出す命の喜びを目の当たりにし、私は深い感慨を覚えたのです。デジカメで自分の画像を見ることも初めてらしく、ささいなことでも顔に微笑みがパッと輝くのです。出会う人は皆、Shumeiの指導や援助に感謝を示してくれました。

ロンと私は日の出を撮影するチャンスを狙い、日が差す前にビデオとカメラをそれぞれ構えて、夜明け前から気を張っていました。初めて迎えたザンビアの朝焼けに感銘しました。自然農法ショーが始まる前の誰もいない早朝の舞台裏のような村を歩いていると、まだ寝床に就いている時間帯のようで、女性たちだけが朝食の支度とその日の食事準備に追われていま

マシュウと子どもたち

ペンバ地区で大勢の群衆に迎えられる

した。あちこちに炊事の煙が立ち込めていました。

私は単に写真を撮るだけでなく、足を止めておしゃべりしたり、眠たそうな子どもに挨拶したり、カメラの映像を見せたりしました。この人たちと心のつながりを持ちたかったからです。しばらくすると、円陣を組む男性たちに招かれて、その輪に割り込みました。彼らは「酋長」（村の部族のリーダー）である、と後で知りました。私は指図されるままにしゃがむと、ボウルにくんだ水を両手に注いでくれました。次に皿を渡されると、近くで炊事をしている女性が食事を配り始めました。

それは、主食シマでした。これはトウモロコシをひいた粉で作られ、ねばねばしています。他に、豆、丸ごとのトウモロコシ、濃い緑色の野菜、汁のしたたる羊肉も出されました。この食事は本当に「冒険」でしたが、とてもおいしそうでした。つまむ道具がないのに躊躇すると、歯をむき出した笑顔の視線を一斉に浴びました。そして、皆一緒に両手で食べたのです。西洋人としての感覚を捨ててかぶりつき、そ

アメリカへ持ち込まれた美しい手編みの籠

ばで味や香りを満喫する私の姿に感動したようです。まさしく彼ら村人となじんだ瞬間でした。長時間の飛行距離や地理的な距離にもかかわらず、自宅のようにくつろぎ、村人の歓迎を受けた私の心からは、距離など吹っ飛んでしまいました。

2、3日後に第5回自然農法ショーを祝ったムババラ地区を離れ、ペンバ地区へ移動しました。こちらは第2回目の自然農法ショーを催す準備の最中でした。道中は長く、でこぼこした埃っぽい道が続きました。アラン・今井がムババラ地区を訪問した最初の5年間、道路は未舗装で同じような感じだったそうです。ただ、ここは平たんでなく丘があり、そこからはるかな美しい視界が望めました。

私たちはちょうど日没前に到着し、驚きの瞬間に遭遇しました。屋根にスーツケースを積んだランドクルーザーが走る光景は映画の1コマのようで、車が止まると、明るい服を着た女性たちが、踊り、歌い、微笑みながら近づいて来ました。骨まで響くような乗り心地から開放され、車から降りると、その女性たちの背後に何百人もの絶え間ない人波が目に入りました。村人たち全員が私たちに会いに来たのです。私たちがカメラやビデオで撮影するのも構わず、どんどん押し寄せる群衆の波にすぐのまれ、写真すら撮れませんでした。今まで受けたことのないような感謝の念に取り囲まれ、方々から押し寄せた人々からは笑顔で握手を求められ、お礼を述べられました。

私はロンとクリスと一緒に日が暮れるまで、村人の陳列品を見て回りました。獲れたての野菜、大きな瓜、自家採種の種が並ぶ中に、美しい手編みの籠が目に留まりました。その日の夕飯を食べながら、クリスは感動を抑え切れない様子で、今後も援助を続けたいと熱く語ってきました。私たちも同感で、また、きれいな籠に見ほれてしまったので、購入して支援しようと決めました。現地通貨のクワチャを米ドルに換算すると、値段は1、2ドルに過ぎませんでした。「全部買おう」という私の提案に、皆賛成しました。

私とクリスとロンは翌日売り場へ出掛け、持ち帰れるだけの

籠を買いあさりました。村人たちが、私たちの大量買いを喜んでくれているのは分かっていましたが、私たちはもう一歩踏み出した計画を考えました。つまり、アメリカで籠を使った草の根支援を内緒で計画したのです。これは、ささやかな寄付金をお願いし、そのお礼に籠1個プレゼントするというものでした。

まず、この趣旨を分かってもらうために、チラシを作成しました。帰途の機内で撮影写真に目を通すと、だいだい色のセーターを着た娘の写真に目がくぎ付けになりました。何千枚ものうち、これが一番気に入りました。この娘の表情と瞳は私のアフリカ体験の全てであるように、アフリカの美と喜びだけでなく多くの困難さえ見つめていました。長い長い時を生き長らえた昔ながらの知恵が、この娘の顔に映っていたのです。とっさに浮かんだ文句は「一人の子どもを育てるには村全体が協力しなければならない」で、この小さな支援活動は「村プロジェクト」と名付け、「村とつながろう」と皆に呼び掛けよう、とひらめきました。

写真（右上）の女性と幼子が抱えている分を含め、全部で51個の籠をアメリカへ持ち込みました。この原稿を執筆した時点で、約2300ドルの援助金が集まりました。これは現場で最初のインフラ建設に使われる予定で、衛生状況を改善するためのトイレ整備にも充てられます。ペンバ住民の画像や優美な手編みの籠が寛大な支援につながった事を知れば、彼らがどんなに喜ぶか想像されます！

「村プロジェクト」の発想は、私の「アイデア」でない気がします。昔からの知恵と言う方が当たっているでしょう。この幼い少女の美しい顔に、何となく読み取れたのです。普遍的な真理が胸に迫ってきたのです。クレストンにあるShumei International Institute ※で7月に、すてきな映像を交えてザンビア旅行の発表をしました。その内容は、自分が本当に「村」の一員になったと実感できたことです。Shumeiの創始者である岡田茂吉師が『世界人たれ』と説いているように、世界人という意味の核心を悟れたと思います。

電話、飛行機、インターネットの普及によって、世界は実に狭く感じられるようになりました。けれども、精神的なつながりの方が重要であると思えるのです。世界人になるために海外を飛び回るなど、誰もが可能というわけではありません。世界的に資源が枯渇しつつある現代に、これは持続可能性に欠けます。素晴らしい機会に恵まれた私たちは、学んだことを伝える責任があると痛感し、言葉や映像だけでなく肝心な行動で示したかったのです。この文章、この賢い少女の面影のどこかに皆さんの共感を求めたいのです。魂のつながりを通して世界中の人が共鳴し、世界がより良い方向に進むことを願うばかりです。

※ Shumei International Institute … アメリカ・クレストンにある秀明国際交流センター

Shumei被災地支援活動報告

滋賀・絆・アート支援プロジェクト

3月11日、日本に未曾有の被害をもたらした東日本大震災。福島第一原発による放射能汚染の被害は今もって先の見えない、大きな問題となっています。

震災直後から、全国のさまざまな機関、NPO、個人が、被災地や避難者の支援活動を続けてきました。秀明インターナショナルとしても、震災直後から現地にスタッフを派遣し、がれき撤去や、炊き出し等の復興支援のボランティア活動を継続して行っています。また、関西広域連合として、滋賀県は福島県を支援することが決まり、県内には、被災地から、約400名の方が避難され、現在もなお、不自由な生活をされています。

4月21日、滋賀次世代文化芸術支援センターの呼び掛けで、「アート・芸術による被災者への心のケア」を目的に、滋賀県内の文化施設や行政、企業、市民活動団体等による実行委員会を設立し、「滋賀・絆・アート支援プロジェクト」による支援活動が始まりました。秀明インターナショナルは、その協力団体として、6月、10月の2回、被災された方々をMIHO MUSEUMと秀明自然農法「しがらきの里」にご招待し、「美しのミュージアム・美しの里ツアー」を行いました。

また8月には福島県いわき市に赴き、「滋賀キッズミュージアム in 福島」にも協力して参加させていただきました。

美しのミュージアム・美しの里ツアー

6月11日、「美しのミュージアムツアー」を行い、MIHO MUSEUMと、秀明自然農法「しがらきの里」に被災者9世帯29名をご招待しました。

最初は、迎える側としてどのように接したらよいか戸惑いもありましたが、お年寄りから乳幼児までの幅広い年齢層に、細やかに対応ができるよう、大人の方には大人が、小学生には小学生がサポートさせていただこうと、ボランティアスタッフも親子で参加し、共に一日を過ごしました。

午前中は、「しがらきの里」で火起こし、野菜摘みなどの自然体験、豆腐作りや流しそうめんなどを楽しんでいただきました。お昼には、自然農法の食材で作った昼食を頂きました。午後はMIHO MUSEUMに移動し、子どものグループ、大人のグループに分かれて、美術品を鑑賞し、体験プログラムでは、作品を作り、笑顔で見せ合う姿もありました。当日は、休館のため、参加者の方々だけで、ゆっくりと楽しんでいただくことができました。

プログラムの最後は、屋外で秀明太鼓の演奏会でした。山々に響く太鼓の音に、思わず涙する方もおられました。演奏会の後は、太鼓奏者と一緒に太鼓をたたく交流もありました。ある小学6年生の男の子は、最初は暗い表情で、会話も少なかったのですが、古代エジプトの美術品に関心があったようで、次第に笑顔が見られるようになり、他の子どもたちとよく話すようになりました。そして太鼓演奏後は、楽しそうに太鼓をたたいていました。大人の方は、「明日からの勇気と元気を頂いた」と、大変感動されていました。

2回目となる10月15日の美しの里ツアー」は、参加者9世

帯28名、その半数は6月に参加された方が再会を楽しみに来られました。午前中はMIHO MUSEUMでの展示解説ツアー、体験プログラムに参加されました。秋季特別展「神仏います近江」では、滋賀の仏像をご覧いただき、楽しい時間を過ごされました。

午後からは、秀明自然農法「しがらきの里」へ行き、自然農法のおにぎり弁当を頂きました。お米は昨年収穫された福島県産を使い、参加者は、古民家の縁側や囲炉裏など好きな場所に座り、ほっこりとした雰囲気でのひとときでした。昼食後、子どもたちは、自然の中で、小川の魚やカニを捕ったり、焼き芋作り、お団子作りに、夢中になって楽しんでいました。茶道体験では、静寂のひとときを過ごしました。

夕方には、滋賀次世代文化芸術センターのセンター長によるマジックショーがあり、ツアーの最後は、「牧美花さんのバイオリンコンサート」でした。牧さんは、左手の指にハンディを持ちながら、「鈴木メソード」を学ばれ、国内外で自然の癒やしをテーマに演奏活動をされているバイオリン奏者です。震災後は、地元でチャリティーコンサート活動もされています。当日は、森の精霊のような衣装で登場され、子どもたちの好きなアニメの音楽、葉祥明さんの絵本「生んでくれてありがとう」の朗読など、牧さんの優しさと、参加者の心が交流し、とても温かい心のこもったコンサートになり、多くの方々が涙を流し感動されていました。演奏後は、牧さんを囲みながら、夕食のカレーを頂きました。アットホームな雰囲気の中、会話もはずみました。参加された方からは「心から楽しませていただいた。避難していることを忘れるぐらい温かくおもてなしいただき、とてもありがたく思う」など感想を頂きました。そして、皆さんスタッフと仲良く握手をして、笑顔で帰って行かれました。

「滋賀キッズミュージアム in 福島」

美しいアートを被災地へ

会場となった「いわき市考古資料館」

8月27日、28日、アートによる支援活動「滋賀キッズミュージアム in 福島」を福島県いわき市内の文化施設2館で開催しました。被災地の方から、福島第一原発の事故は、福島の人たちの生活を一変させ、子どもたちは自由に外で遊べなくなり、放射能への恐怖と不安の中で暮らしているという厳しい現状を伺いました。現地へ出向き、子どもたちの心に寄り添い、アートに触れる楽しいひとときをお届けしたいとの思いからこのイベントを企画し、滋賀次世代文化芸術センター、MIHO MUSEUMと共に準備を進めてきました。

会場は、滋賀県文化振興課に橋渡しをしていただき、いわき市内2カ所の文化施設（暮らしの伝承郷、考古資料館）に決まり、いわき市教育委員会と、滋賀・絆・アート支援プロジェクト実行委員会の共催という協力体制で行われました。2会場には、アート体験コーナーとして、MIHO MUSEUMのわくわくミュージアム、陶芸体験、茶道体験、染色体験、よし笛制作、よし笛コンサート、和太鼓ミニコンサート、マジックショーを企画し、滋賀の竹を持ち込んでの流しそうめんの準備もしました。屋台コーナーとして、新潟から秀明自然農法の食材を使った炊き出しの協力があり、3千食の準備をしました。また、今回の支援に対して、滋賀県内文化施設、企業、個人から支援の品物や、メッセージ付のクッキー等をお寄せいただき、滋賀からのプレゼントとして、参加者一人ひとりに手渡しをしました。

当日は会場の文化施設関係者の予想に反し、早朝から入場を待つ親子の列が見られ、入場開始とともに会場から人が溢れ、大変なにぎわいとなりました。中には、高速道路を使って1時間以上かけて来られた方、

「いわき市暮らしの伝承郷」

受付風景

流しそうめんに並ぶ子どもの姿も見え、本当に皆さんがこの日を楽しみにして来てくださったことが、滋賀といわきのスタッフ一同、とてもうれしく思いました。そして、2日間で2054名の方が会場に来られ、会場2館とも、開館以来の最高入館者数を記録したと喜んでおられました。参加者の方は、私たちスタッフへ自分たちの現状をお話しくださったり、気軽に声を掛け感想やお礼の気持ちを伝えてくださったり、参加者とスタッフと心も通い合い、本当に楽しい充実した2日間でした。

参加された方の感想に、

「震災以来、ひきこもりがちでしたが、これが外出するきっかけになり、子どもたちがアートに触れることによって、心が穏やかになれたと思います」

「この夏一番の楽しいイベントでした。子どもばかりでなく、親子で本当に楽しむことができました。目に見えぬ放射能との戦いで、気を張っている中で、少しでも楽しく思える時間がとてもありがたいです」

「今までとは違った生活になってしまい、子どもたちに何をしてあげられるか、大人も必死です。このようなイベントで子どもたちが喜んでくれて、とても助かります。自分もできることを、他の人にできるように頑張りたいと思います。」

「遠く滋賀から力強いご支援、社会に向ける愛情の強さに感動しました。原発の事以来、肩身の狭い思いをしている中で、温かい人情に触れてこれからも頑張ろうと勇気を頂きました」

など多くのお言葉を頂きました。

また、子どもたちからは

「今、一番行きたくない場所？福島へわざわざ来てくれて、とてもうれしく思います」

「しがの人がこまっているときには、福島のぼくたちがたすけにいきます。遠い所、ここまで来ていろいろな体験をさせてもらってうれしいです。」

このような子どもたちの言葉は、とても心に響きました。

被災者の皆さんの心と体が癒やされ、会場が笑顔で満ちていたことは、本当にうれしく、感動の支援活動となりま

した。考古資料館の館長さんからは「いわきは、震災直後の〝生きるか死ぬか〟、次の段階の〝衣食住は大丈夫か〟、そして放射能の恐怖は消えませんが、今やっと〝教育と文化〟にも目が向けられるようになってきています。その証しとして今回の企画には、2日間で合わせて2054名が来館しました。東日本大震災、原発事故による放射線問題は、非常につらく悲しい出来事ですが、被災直後全国から訪れた炊き出し支援と現在でも毎日続いている復旧ボランティアの支援、そして、今回皆さまの心の支援活動により、日本そして世界中の人々が、自分たちを「支援してくれている」・「見守ってくれている」ことを、そしてそれが「絆」であることを、子どもたちは知ってくれ、心の中に焼き付けてくれたはずです」とのお礼の言葉をいただきました。

今回の3つの被災者への支援活動を通して、強く感じたことは、芸術の持つ力の素晴らしさです。美しい自然、美しい美術品に触れ、また自然農法の体に優しい食事を頂くことで、参加

者の皆さんが心からの笑顔になり、本来の心を取り戻し、元気になっていかれる姿を見せていただき、あらためて、芸術の素晴らしさを感じました。

私たちがさせていただいた支援活動で、参加された方がアートによって、癒やされ、つながりを持たれたことはとてもうれしく思います。しかし、今なお、被災地の方々、避難された方々の抱えていらっしゃる現状は、まだまだ先の長い、見通しが付かない難しい課題が山積みです。私たちは、そういった被災者の皆さんの心に寄り添い、長期的な視点で支援活動を継続したいと思います。そして、今後も、「美を通して世の中を美しく、平和に、楽しいものにしたい」という想いで「美による感化の社会貢献活動」の輪を広げていきたいと思います。

Shumei
NPO法人 秀明インターナショナル
〒529-1814　滋賀県甲賀市信楽町田代353-1
TEL:0748-82-3140　FAX:0748-82-3143
E-mail：info@nposhumei.or.jp
http：//www.nposhumei.or.jp

FSC www.fsc.org
ミックス
責任ある木質資源を使用した紙
FSC® C012538
VEGETABLE OIL INK

2011年12月1日発行